R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用

伝えたい

戦後79年 過去から未来へ

伝えたい記憶と言葉

平島佐一さん 92

諏訪市元町

平島佐一さん

錆びた記憶の中から（幼少年時代の）

歴史家にいわせると20世紀は「戦争の世紀」であるという。

私は昭和7（1932）年、蓼科山を抱く寒村、北山村に生まれた。前年の昭和6（1931）年、満州事変が勃発、日本が戦争への舵を切った翌年である。以来あの忌まわしいと言われる15年戦争（満州事変・日中戦争・太平洋戦争の総称）へ向けて日本はファシズムへの道を突き進んだ。私は昭和14（1939）年、地元の北山尋常小学校へ入学（7歳）、この年第2次世界大戦が始まった。私の幼少年時代はピタリと15年戦争と合致する。

今、小学校卒業名簿を見ると、当初の入学者より児童数はぐっと増えている。その中には朝鮮からの労働者の子供、疎開者など多数の名前が見える。これを見ると戦時下の教育事情のほどが推察されるというものである。

1　諏訪鉄山のこと（小学校時代）

友人に鉄山から通う友がいた。彼の母は飯場の仕事をしていた。飯炊き婦人である。鉄鉱石を採掘する多くの人達への食事の賄いである。そこで生活し、学校へ通う友を何回か訪ね遊んだ。母親に「仕事大変ですね」というと「いいえ、お国の為ですから」ときっぱりいわれた。戦争をわたしは忌まわしいといったがそれは愚かのこと、戦争は「天に代わりて不義を撃つ」、戦争は「聖戦」と日本人は信じていたのである。そしてひたすら汗をかいて働いていたのである。私たちは太平洋戦争のことを〝大東亜戦争〟と教えられた。〝大東亜共栄圏〟の大理想を建設するのだと頻りに説かれていた。戦争は美化され、正当化されていたのである。

友は小学校を終わると諏訪の中学校へ通うようになった。昭和20（1945）年終戦。教育は軍国主義教育から民主主義教育へ切り替わった。六三三制が敷かれた時、友は中学で止めて新制高校へ進むのを断念した。社会に出て働くといって「俺も一緒に勉強したい」がそれはできない。俺の分まで一生懸命勉強してくれよな」といって涙を流した。学費に行き詰まったのが原因であった。友の無念さが偲ばれる。

2　戦中・戦後の飢餓時代〝こぼれ話〟

◇馬鈴薯1個は金の卵～お百姓さん

あるとき、汗と土に塗れ、働いていた家の者に「お百姓さん」ときれいな敬語を使って呼びかけてきたひとがいた。「え？誰のこと？見れば私たちしかいない。「畑のおいもを撥ねだしの上等ものでなくていいから譲ってくれないか」ということだった。少しばかり分けてやると最敬礼をして何回もお礼をいって帰っていった。

◇俺が大学を出られたのは「闇米のお蔭だ！」

小学校時代からの友に東京の大学を卒業できたのは家が農家で「闇米のお蔭だ」と語った友がいた。当時（戦中・戦後）、農家は〝供出米〟と家で食べる〝食いぶち〟を除けば、非公式にお米の売買ができるという抜け道があった。

◇一度でいいから白米の真っ白なご飯を食べてみたい。一宿一飯の恩義に預かりたい。当時は食べられるものはなんでもたべた。

※お寄せいただいた原文を尊重して掲載しました。